

インタビュー

VOL.3

上野 たまき 先生

《プロフィール》

京都府立医科大学卒

綾部市立病院 小児科部長



私のきた道

夫と一緒に赴任できるからという理由で綾部へきて9年が経とうとしています。当時1歳だった息子も春には小学5年生です。

綾部に来てはじめての数年は、いつやめようかと毎日考えてしまうほど、大変な日々でした。地方の基幹病院といっても小児科は2名で、2日に1日はオンコールです。当時は院内託児所もなく、近くに頼れる親族もいないため、こどもが熱をだしたときや、二人ともよびだしがあったときにはやりくりが大変でした。それでも長く続けていると、心が折れそうだった日々が遠い過去となり、やりたいことが増えていきました。これは若い医師が赴任してきてくれて、この医師のためにも症例数を増やしたい、地方から発信できることがあると気持ちを切り替えさせてもらえらこと、地域の人や病院のスタッフから折に触れ、先生にここにいて欲しいと声をかけてもらえたこと、同じように育児をしながら勤務医を続けている先輩の存在が大きかったのではないかと思います。

医師の集約化や遠隔診療などの医師不足対策は、地方の医療に従事する側からは少しづれを感じていますが、大学が臨床講師に任命してくれたことは、医学生を直接指導することになり、彼らに地域での取り組みを評価してもらえるよい機会になりました。また、専門機関と連携し、地域のこどもたちに安心して暮らしてもらえる医療を提供できるようにもなり、患者の家族からも感謝されています。

今年度まで医師数は2名のままでしたが、患者数を増やし、研修医の指導を充実させ、モチベーションをたもっています。院内託児所、院内病児保育も軌道にのせ、重症児のデイケアも始めました。まだまだやれそうなのがたくさんあります。

人手不足だから大学へ戻って欲しいと医局長からの電話で後先考えずに大学の修練医として復帰したのはこどもが3ヶ月のときでした。ちょっと手伝うくらいのつもりが、まさかの病棟医でしたが、この時の電話がなければ、今のように常勤で勤務医を続けていることはなかったと思います。このときの大学での人とのつながりは今でも支えになっており、あの日復帰するように声をかけていただいたことをとても感謝しています。

女医の復帰支援の取り組みが最近は盛んですが、やれない理由を探して、支援を求めるばかりでなく、自分が何をできるのか、どうすればできるのかを考え提案していくことが、自分の可能性を広げることにつながると思います。

こどもが大きくなったらなっただ、学童保育は終了が早い上、PTAやこども会は面倒なことが山盛りです。春からは学童保育も卒業になるので、やっぱり育児は心配事が目白押しです。

それでもあきらめなければ続けていけると信じています。

(京都医報 No.1951 2011年2月号より)